

# 秋吉台エコツアーリズム推進シンポジウム

## 報 告 書

～はじめよう、広げよう、秋吉台エコツアーリズム～



平成19年3月

🚦	日時	平成19年3月14日(水) 13時～16時30分
🚦	場所	秋吉台国際芸術村
🚦	主催	山口県 エコツアーリズム秋吉台地域戦略会議
🚦	後援	中国四国地方環境事務所

# 開 催 概 要

## 開 会

主催者あいさつ	山口県知事	二井 関成
秋芳町長あいさつ	秋芳町長	上利 礼昭
来賓祝辞	山口県議会議員	森中 克彦 氏

## 基調講演

テーマ 「具体例から考えるエコツーリズム推進の勘どころ」

講 師 寺崎竜雄氏（(財)日本交通公社企画課長）

## パネルディスカッション

テーマ 「秋吉台のエコツーリズムに期待するもの」

コーディネーター 山本時博氏（山口県観光戦略会議議長）

パネリスト 寺崎竜雄氏（(財)日本交通公社企画課長）  
庫本 正氏（秋吉台科学博物館名誉館長）  
永嶺克博氏（とってゆかいな秋吉台ミーティング事務局長）  
山崎麻里氏（秋吉台科学博物館学芸員補）

## 閉 会

開会行事  
主催者あいさつ

山口県知事 二井関成



みなさん、こんにちは。秋吉台国際芸術村ができて何年になりますか。今日初めてここでご挨拶をさせていただく機会を頂きました。「秋吉台エコツーリズム推進シンポジウム」の開催にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

私が申すまでもありませんが、ここ秋吉台は、秋芳洞とともに、我が国が誇る学術資源であり、山口県を代表する観光資源であります。しかしながら、当地域、美祢市、美祢郡あわせての統計になりますが、観光客は、昭和49年の303万人をピークに、近年では150万人程度と半分程度までに減少しているところ です。

県としてもこの状況からなんとか抜け出さなければという思いで平成16年度に観光戦略会議を開き、秋吉台地域を取り上げて魅力アップをしていくための基本的な方向付けをしました。

平成17年秋にはご承知のように「秋吉台地下水系」がラムサール条約湿地として登録され、国際的にも高く評価されるようになりました。これを契機に秋吉台地域の再活性化に向けた様々な取組が始まりましたことは誠に喜ばしい限りです。

また、とくに私は、当地域の再活性化を図るためにはエコツーリズムを中核に位置づけることが必要であると感じているところ です。

このため、本年度「エコツーリズム秋吉台地域戦略会議」を設置して、自然環境の保全と地域振興の両立を目指す秋吉台型のエコツーリズムのあり方について検討を進めてまいりました。

また、来年度はこれまで県と交流を続けていた中国山東省との交流が25周年になり、韓国の慶尚南道とは交流を続けて来年で20周年になります。この機会に山東省と慶尚南道と連携した「三県省道交流フォーラム」をここ秋吉台地域で開催することにしており、東アジア地域をにらんだ、大きな国際的な舞台としても活用できるようにしていかなければという思いです。

少し長くなりますが、韓国慶尚南道には牛浦沼と

いってラムサール条約で登録された湿地があります。平成20年に慶尚南道でラムサール条約締結国の国際会議が開かれるということもあり、この5月に私も牛浦沼を見に行ってきます。そういうことで色んな関係も深くなりますので、そういうフォーラムを開催したいと思っています。

それから来年の7月から9月に、全国JR6社の協力をいただいて、全国へ向けて山口県の観光PRをして山口県へ来てもらうというデスティネーションキャンペーンを山口県で開くことにしています。ちょうど夏の時期なので秋芳洞はちょうどいいタイミングとなります。ぜひ来年のデスティネーションキャンペーンに向けてもさらにPR活動も展開していかなければと思っていますところ です。

今申し上げたことを通じて行政等も努力するが、やはり地域における住民の皆さま方の、民間のみならずの主体的な取組が大変重要となります。地元では地域ぐるみの推進組織の設立とか人材養成など、エコツーリズムの事業化に向けた動きも本格化していると聞いています。ぜひそういう取組を積極的にして欲しいと思っています。

また、今年度はデマンド型乗合タクシーや白色LEDを利用した洞内照明システムを構築する実証研究などの取組が開始され、その成果にも大きな期待をしているところ です。

どうか今日のシンポジウムを通じて、みなさまには様々な知恵を出していただいて、お互い連携しながら秋吉台地域の活性化を通じて山口県の自然環境の保全と観光振興を大きく牽引いただきますよう改めてお願いします。

最後になりますが、このシンポジウム開催にあたって、多大のご尽力をいただいた地元市町、関係者の皆様、講師やパネラーのみなさまに心から感謝申し上げます、開会の挨拶といたします。今日はよろしくお願ひ致します。

秋芳町長あいさつ

秋芳町長 上利礼昭



秋吉台の山焼きも無事終了し、いよいよ観光シーズンの幕開けとなる季節となりました。本日、秋吉台エコツーリズム推進シンポジウムがここ秋吉台国際芸術村において開催されるにあたり、1市2町を代表いたしまして、一言ごあいさつ申し上げます。

本日は、二井山口県知事様、森中山口県議会議員様、中国四国地方環境事務所野口様のご臨席を賜り、また県下の関係団体からかくも多数の皆様にご参加を頂き厚くお礼申し上げます。

この秋吉台地域では、平成17年11月に秋吉台の地下水系がラムサール条約の湿地登録されたことを契機に、自然環境の保全と観光振興の両立を目指すエコツーリズムの推進を図るため、昨年7月「エコツーリズム秋吉台地域戦略会議」が設立されたところであります。会議の中では、新たな角度から秋吉台の魅力を観光客に紹介するため、モニターエコツアーやエ

コツアーマップ作成等の各事業を展開して参りました。

この地域は、日本最大のカルスト台地「秋吉台」、東洋最大級の大鍾乳洞「秋芳洞」というこの上ない大きな自然遺産を持っております。このシンポジウムを契機に、当地域の観光地としての魅力を鮮明に打ち出し、秋吉台、秋芳洞を単に見ていただくだけの観光地から、学術観光など体験型観光へと脱皮を図り、さらにこれらの持つ個々の何がどれだけ貴重なものであるかを世に発信し今後の取り組みにつなげてゆかねばならないと、心を新たにした次第であります。これからは、秋吉台の1市2町が連携し、自主的・主体的に、この地域内の貴重な自然財産を私ども行政と、本日ご参加の関係団体の皆さんと共に賢明な利用を図りつつ、自然環境を保全し、後世に引き継ぎたいとの決意を表しごあいさつとします。

## 来賓祝辞

山口県議会議員 森中 克彦 氏



秋吉台エコツアーリズム推進シンポジウムの開催に当たり、一言お祝いを申し上げます。秋吉台に春を告げる山焼きも終わり、草花も芽吹き始める新しい旅立ちの季節となりました。この時期に当たり、自然環境の保全と地域振興の両立を目指す「エコツアーリズム」に係わるシンポジウムが、ここ秋吉台地域で開催され、新たな取り組みを始めようと考えられますことは誠に喜ばしく、心からお喜びを申し上げます次第です。

さて、秋吉台は、国定公園に指定されて半世紀になるとともに、その地下水系が、ラムサール条約湿地に登録されるなど、山口県における自然環境保全のシンボリック的存在となっております。私は、21世紀のキーワードの一つは、「環境」であると認識しており、とりわけ自然環境の保全は、重要な課題であると考えております。

そのことで思い起こされますのは、一昨年、当秋吉台地域に産業廃棄物処分場を建設しようとする話であります。時あたかも、ラムサール条約への登録手続きが進められている最中のことでした。当時、私は、この地域がカルスト台地であり、ドリーネや洞窟のある特異な地形であることや、地下水への汚染などを憂慮して、皆様方とともに率先して反対しました。結果的には、許可基準に適合していないことが判明し、不許可処分になった記憶があります。

秋吉台の自然は、これまでに、地元の多くの人々によって守られてきた長い歴史があることは、私もよく存じております。秋吉台の美しい自然が保全され、今日に至るまでには、数々のご苦労があったことと思っておりますが、これも、地元の上利町長さんをはじめ、倉増美東町長さん、庫本秋吉台博物館名誉館長さん、猶野観光協会会長さんなどなど、多くの地元の皆様のご尽力の結果であり、大変大きなご功績であると思っております。

それゆえに、このたび、秋吉台地域のかけが

えのない自然を守るとともに、その賢明な利用を図って行くことを目指して、「自然にやさしい観光旅行」といわれるエコツアーリズムに取り組みされることは、これまでの成果の上に立った、新しい大きな一歩であると、高く評価しているところです。

県議会においても、中山間地域の振興を何とかしなければとの思いから、「山口県中山間地域振興条例」を制定して、地域の取り組みを応援しようとしています。私も、皆様方のお取り組みを、地元県議会議員として、当秋吉台地域の振興のため、全力を挙げてご支援して行きたいと考えています。どうか皆様方も地域一丸となってお取り組みいただき、さらなる成果をあげていただきますようお願いいたします。

終わりに当たり、当秋吉台地域のますますのご発展と、ご参集の皆様方のご健勝をお祈りいたしまして、私の祝辞とさせていただきます。

## 基調講演

テーマ 「具体例から考えるエコツーリズムの勘どころ」

講師 (財)日本交通公社企画課長 寺崎 竜雄氏



### 講師プロフィール

寺崎竜雄氏

財団法人日本交通公社 企画課長

環境省エコツーリズム推進アドバイザー

1963年、富山県生まれ。筑波大学自然学類地球科学専攻、その後大学院では経営学を学ぶ。1986年、日本交通公社入社。観光分野を専門に扱うシンクタンクの研究員として、旅行者の動向調査や観光地振興の計画などに携わる。03年度からは環境省の「エコツーリズム推進事業」にかかわり、エコツーリズム推進会議の事務局や、エコツーリズムモデル事業では、4地区の支援機関と2地区のアドバイザーを担当する。

エコツーリズムという言葉は分かりにくいと一般には認識されているようだ。観光関係の方が集まった場合も、知っている方は3分の1から半数だけであるのが実態。言葉で説明する概念・定義も出てきているが、今日は感覚でもってエコツーリズムとは何かを感じていただければと思う。

私もエコツーリズムという言葉に触れてから14・5年になる。この中で地域に行ったり文献の中で感じたことを伝えたい。いくつか地域の取組みの実例を紹介して行きたい。これが秋吉台地域の今後の取組みの参考に1つでもなればと思う。

エコツーリズムという言葉にふれたことのある方が、エコツーリズムと聞いて真っ先に出てくるのが鹿児島県の南の屋久島だと思う。1993年に世界自然遺産登録された後、一層、観光に活気が帯びた。そこで展開されている白谷雲水峡ツアーについてさわりだけ紹介したい。実施しているのは屋久島野外活動総合センター。3人の若者により始められた民間の有限会社である。1993年か4年に設立された後、ずっと現在まで続いている。そこが展開している白谷雲水峡ツアーは、開催日は毎日、日程は朝の9時から5時半と一日かけて行われる。

参加費は一人につき1万5000円と高額にも関わらず、多くの方に支持されて、年間7～8百

人の方を集めている。白谷雲水峡という屋久島の森を巡るルートがある。通常なら私の足だとゆっくり歩いても1時間か2時間で回ることができる。自由に行動するのではなく、屋久島野外活動総合センターの社員、専属の自然ガイドが付いて森の中を案内する。

この映像はガイドが案内している風景です。奥に見えるのは屋久島の切り株です。普通の方なら屋久島の風景を見て感動して通り過ぎるだけだが、ガイドはそこで立ち止まって「みなさん、ちょっと見てください。切り株の上の木が生えかた見てください、切り株の上から木が生えているのはなぜか？」と投げかける。杉の実が上から落ちてきて、それが発芽している。屋久島は非常に雨が多いところ。雨が多いと実が流れ着床しにくい。実にとって切り株が一番発芽しやすい最適な場所。それをこの木を見ただけで屋久島が、雨が多いこと、地形のことを話してくれる。もう1つは屋久島の森というと、世間では手つかずの森だから世界遺産となったのではないかと思われている。

しかし、実際は、屋久島の森は人が生活の場として活用してきた森。その証拠にこの切り株ができています。昔は林業で生計を立て、短冊状の木にして幕府に納品していた歴史がある。この切り株から森と人の生活の歴史の関わり合い、そこまでを解説して一日が終わるといった形に

なっている。

この絵は根っこの中のトンネルを説明している様子。「どうしてできているか分かりますか。木が横になって倒れた所も実にとって一等地になる。そこを根っこがまたぐようにして木が育った。このトンネルはその下になった木が朽ちてできあがったものだ。」と説明している。

これはハンディキャップを負われた方に対してボードを使って案内している様子。これは彼らの事務所、ツアーの前に森を見るだけでは分からない、屋久島全体の地形を説明受けてスタートする。

この会社は白谷ツアー以外に森歩きだけでも他に3つのコースをもっている。どのツアーに参加しても1万5千円である。通常は器材費レンタル費等積み上げていくが、彼らの考え方は技術を教える、器材をレンタルするのが仕事ではなく、一日一緒に屋久島を遊んで楽しかったと思ってもらえるその対価という意味合いでもって価格を設定している。

93年から世界遺産登録を機会に、右肩上がりに屋久島、種子島地域の観光客数が増えた。

90年後半から横ばいで現在の観光客数は20万~30万人となっている。一方屋久島野外活動総合センターの実績は93年こそ100人程度だったが、その後右肩上がりに増えている。リピーターを増やしている。この事例から言えるポイントの1つは、専門的な知識を備えた自然ガイドが案内しているということ。

これまで観光客は木を見て素晴らしいというだけで済んでいた。しかし木が生えている背景が必ずあり、木を見て森を見ずというところを上手く伝えている。もう一つは、このツアーのきっかけが、観光客が来ても屋久島の表面しか見てない、森の深さ、人々の生活をもっと面白く観光客に伝えたいということから始まったことにある。

かつての観光は屋久島の杉を見ただけで人が来た。しかし今は素材勝負では古い。ガイドの働きかけでこれまで気付かなかったことを発見して興味をもった、楽しかったと思ってもらうこと、このことが今の観光マーケットでは満足に繋がるといわれている。

ポイントの2番目はこういった旅行がしっか

り旅行マーケットに受け入れられ、高額ツアーに関らずリピーターにも繋がっているということだ。

屋久島を訪れる観光客の行動は、これまで観光バスに乗って島の周りを回るだけだったが、こういったガイドツアーに参加してこそ、屋久島観光をしたということが広がり参加する方が増えた。

もう一つはこういったガイドは、約15年前は10名程度だったのが、今は200名近くのプロのガイドがいるようになった。島の方だけでなく、島外からも一生ここで生きたいという方が訪れてガイドを始めるようになった。最も活躍するガイドの年収は、1千万円を超える。この自然ガイド業は新たな地域産業になったというところまで育っているといえる。

ただ、これが明日あさってすぐに秋吉台地域で起こるといふ訳にはいかない。

これに関してポイントの4ですが、長い年月がかかるといふことで、屋久島もこのような状況になるまで10年~15年かかった。大きな変化を求めることなく、小さな成功を積み重ねた結果だといえる。

また、この社長、スタッフは当初から考え方がほとんど変わっていない。スタートの時に信念を明らかにして取り組む、中途半端な気持ちでは長続きしないというのが屋久島、それ以外のところでも感じた。

一方、こういった大きな産業となるといくつか問題も島の中で起きている。昨日まで違う仕事をしていた人が明日からガイドをやるということによって観光客の不平や不満が出ている。あるいはもう少しで危険な目に合う所だったというケースもある。

また本来は観光客を連れて案内するような所ではないところまで連れていき、資源の破壊も懸念されている。これに対してみんなで話し合ってなんとかしようという動きもでてきている。

もう一つ目の事例。日本を代表するような自然で、一昨年、世界自然遺産に登録された知床というところ。ここもガイドが30人~50人と急速に増えてきている。90年半ばから野生生物を研究する財団、知床財団の人たちが動物や何

かを研究した成果を、観光客に伝えよう、普及していこうということで始めた取組みがある。

知床五湖めぐりツアー。これは毎日開催しているツアーで、所要時間約2時間。参加者一人800円。年間参加者数は5万~10万の数を扱っている。知床観光の特徴はまさに旅行会社のみ。

東京、関西圏から押し寄せた観光客を、観光バスへ乗せて回るのが主流。今も多い。ただ知床は道路の事情があって、町営の知床自然センターに観光バスが立ち寄ることが多い。

そこでシアターを見て知床の概要を知る。面白いのはただ立ち寄るだけでなく、知床自然センターが考えたのは、ここから先は専門のガイドをバスガイドの代わりに乗せるということ。バスガイドが案内しきれない部分を専門のガイドが案内する。そして核心的な地域である知床五湖という場所を自然ガイドがついて案内する。バスだけでなく観光船の中で案内したり、知床であれば夏が一番いい時期だが、冬も特別な案内するツアーをつけることで冬の集客を増やしている。

ここの特色は、屋久島のようにエコツアーに参加したいという方を寄せているわけではなく、すでに訪れている一般的な観光客(マス観光客)を案内している。ツアーに専門のガイドがつくと案内をしても、はじめは、特に他のツアーと反応の違いはなかったが、ツアーを終えた後の感想を聞くと満足度がまったく違う。そういうことから始めた結果、自然ガイドがついていないと参加しないという人が増えてきた。

一気に観光のスタイルを変えるのではなく、徐々に観光客に仕掛けをしていく。そうすると観光客が泊まる一般の観光事業者にも意識が広まっていく。エコツーリズムは従来の観光に取って代わるものではなく、少しでも事業者、観光客の意識を変えればいいんじゃないかということから始めてもじわじわ広がってくる。

結果として滞留観光が始まると、マイナスイメージにも変化が起きている。一方、参加された方も、今まで自分が気付かなかったことをガイドによって解説される。そのことによって旅行の楽しさの中に、小さな環境に対する配慮が出て、自身の生活に持ち帰って何らかの変化が

出てくる。知床の友人達は自然を守っていきたいから、他人に来て欲しくないという気持ちがあるが、一方で知ってもらうことで地球規模の環境保全に取り組めるのではないかという気持ちで取り組んでいる。

軽井沢の温泉宿の一事業部としてスタートしたピッキオという、ガイドの数名からなる団体がある。そこがやっているネイチャーウォッチングは毎朝9時から11時くらいで、旅館のフロントに来れば毎朝ツアーが開催される。評判を聞きつけて周辺の別荘滞在者や他のホテルのお客も参加するようになってきた。参加費1500円。何の変哲もない裏山をガイドに先導されて自然観察会のようなことをする。年間4~5千人を集める。また、夏ともなれば軽井沢に沢山の子供が集まるが、この子供を対象にしたエコちび森遊び塾は、年間3~5百人集まる。一日4千~5千円くらいで親は子供を預けて遊びに行く場合も多い。ホテルの宿泊客、軽井沢に滞在している方が気軽に参加できる。ショッピングやゴルフという違う目的で訪れた方が、色んな遊びの中から選択して参加している。

先程の例でも話したが、子供向けツアーもずいぶん充実している。大きな特色は毎日実施していて、参加者が一人でもやってくれる。予約なしでも気軽に参加できること。これが評判を得ている元になっている。

ここの社長と話した時、この値段にしたのはなぜかと尋ねたら、だいたい2~3時間で巡るツアー、これは映画を一本見るのと同じ時間のエンターテイメントである。スタッフには、ライバルは映画。お客さんが映画に行くかこのツアーに参加するか、そういった気持ちでやりなさい。映画より面白いことをやることができるよう努力しなさいと言っていると聞いている。

以上が最先端の国内旅行その1ということで、短いツアーの話をした。今度は泊りがけでやっているツアー話しをしたい。秋のウォーキングツアー、同じピッキオが中心となっているところ。毎年6月と10月に3泊4日のコースで組まれている。非常に人気があり、リピーターもずいぶん多い。予約が取れないこともある。驚くべきは一人当たり10万円という高額なものであること。何がこれだけの価値を生み



出しているのかという点から話していきたい。

初日はネイチャーウォッチングと同じような裏山、国設野鳥の森というところなのですが、そこをバードウォッチングして回る。参加者はみな自分の双眼鏡をもっており、バードウォッチングが好きで頻繁にされている。この方達を満足させる何かがある。

ここでも主役は自然ガイドである。これまで話してきたよう、ガイドの役割は案内するだけでなく、ツアー全体の物語性を作りあげるシナリオライターであり役者であり演出家である。

この写真は野鳥観察から帰ってきた後で振り返っているところ。シジュウカラの重さについてみなに質問したり、下に落ちている葉について説明したりしている。ツアー客は勉強しに参加している訳ではない。とかく屋外での活動は技術を高めたり体力づくりと思われがちだが、このツアーは旅行の1つの形態。この工夫として、ところどころ休憩してお茶を飲んだりゆっくりする時間を作る。

もう1つ、アウトドア系の旅行といえば、お風呂にも入らず屋外の活動をすると思いがちだが、我慢することがアウトドアにとって必要ではない。昼間は汗をかいても、夜はシャワーを浴びてゆっくりビールを飲む。日中に自然の中で体験したことを思い起こす時間にもなる。加えて食事は旅行の大きな楽しみ。

この日の旅行は好きなものを選んで食べた。ガイドも一緒になって交流する。2日目は生活の場、軽井沢の町を案内する。軽井沢ならではのものや、歴史的な地を訪れる。人と自然、軽井沢の歴史・文化といった生活もガイドが案内するネタになっている。町で有名なお店の厨房でソーセージ作り、地元で古くから伝わる教会で神父さんから話を聞く。普段は入れない所だが、神父はこのツアーをつくっている社長の通っていた幼稚園の園長先生だった。地域から古く住んでいる人だからこそ企画できたプログラムである。

その日の昼食は緑の芝生が広がるところにテーブル、テーブルクロスが敷いてあって食事となる。これは先程作ったソーセージを燻したものを、ホテルのサービスマンが先回りして茹でてもらう。お皿、食器はホテルの持参であり、

紙皿紙コップを使わないという環境への配慮が存分にされている。午後からスタートする前になると地面に座り込む姿が見られる。都会暮らしの方は葉っぱや土に触るのも敬遠しがちで、自然との距離がずいぶん離れている。

このツアーでガイドが自然との距離を近づけるように働きかけたことで地面に座って土の温かさを感じる風景を見ることができた。自然との距離を縮めていくのもガイドの見えない努力。

3日目はハイレベルなことに挑戦ということで、トレッキングというコースをやる。休憩は浅間山で、最も綺麗に見えるところに連れて行ってくれる。自然に包まれた時間が止まるような雰囲気の中で、心が安らぎ、夫婦が寄り添う姿が見られる。

私は非常にいいものを感じた。日常的にはおそらくこういうシーンもないかもしれないが、旅先の非日常の中で上手くガイドが働きかけることでこういうシーンが生まれたのだと思う。最初に10万円の元は何なのかと問うたが、秋吉台と比べるとほんとにありふれた自然しかない。里地・里山しかない。しかしツアー中はカメラマンが撮り「写真は私が撮るのでお客さんとはとにかく目に焼き付けて下さい」といい、最後にアルバムにして配ってくれる。

ホテルのサービスマンも食事以外にも地元の名産のキビ団子を作ってくれたりする。このツアーの大きな特徴は、全て素材の力ではなく、ソフト＝人が作った価値によってできあがっていることにある。

ガイドの働きかけが、ありふれた自然を価値あるものにする。そして自然だけではなく、地域の歴史、生活、文化、産業、住民までも含めた観光資源として活用している。

まさに人的サービスによって素材に付加価値をつけ、これまでの資源だのみの観光を頼らず、人的サービスで人を惹きつけている点が特色。

前半中の最後の事例、南大沼市、かつて六日町といわれていた所の農業体験大学の夏休み芋ほりコースです。7月20日から8月17日まで2泊3日で毎日開催している。

魚沼産こしひかりの名産地、また酒で有名な

八海山のふもとのところ。参加費、大人 2 万 2 千円。対象は家族連れ、子供は 15,400 円。

このツアーが始まったきっかけはスキーブーム時、ペンション開発が進んだ。しかしスキーブームが下火になり、夏になるとお客さんが来なくなった。客を呼び込むための策として、八海山パークホテルの支配人が事務局をやり、地域の民宿やペンションに声をかけてツアーを開始した。

初日は入学式を行い、夜はロープウェイに乗る。翌朝は農家の生活の場にお邪魔する。農業の手ほどきは農家の方がやるが、言葉が伝わらなかつたり、観光客の体調管理等は支配人やペンションのご主人が行い、地元の方と観光客をつなぎ合わせる役割を担う。畑は観光用ではなく、実際に生産しているところで農業体験をする。地元の小さいじゃがいもはぼぼっこといい、ぼぼっこ煮の作り方を習う。その他にも生のとうもろこしを食べたが、その甘さは今でも残っている。聞いたことより実際に体験したことの方が印象に残る。

支配人は初日から「食事はご飯食べ放題だ。」と言う。「何を忘れても米の味だけは忘れないで欲しい。自分達は魚沼産の日本一の米作りをしているから、その米の味だけは覚えていて欲しい。」と言っていた。その他にも川遊び、スイカを切って食べたりした。3 日目は地元の蕎麦打ち名人村山さんと地元のおばちゃん達が指導員として有償アルバイトで参加し、蕎麦打ちを教える。昼食はつきたてのお蕎麦。支配人は村山名人に対して子供のついた蕎麦を食べさせる。それは子供達に指導した自分の教え具合がどうだったかを確認させる為。最後に卒業した証として賞状をもらう。農業体験大学の理事長は六日町町長、学校長はJAの組合長ということで、この取組みは町を上げてみなさんを歓迎していることを示している。

スタートしたのは 1988 年。1993 年頃から本格的に広まっていった。2004 年は地震の影響で落ちたが、ふもとの温泉旅館組合等にも広まり、それによって 6 千泊増えた。2004 年の売り上げは宿泊費を除いて 1,600 万円。リピーターは参加者の 6 割。私も以前参加したが、秋にもう 1 度参加した。ポイントは地域振興のための

活動、事業として実施しているということ。参加者の満足をどうやって高めるかということ。とかくこのような場面は、提供側の思いが強すぎて自分の生きがいとなりがちだが、参加者の満足を第一に考えることが大切。

もう一つは本物を体験させていること。自分達の村の自慢を知って欲しいんだというメッセージや理念が随所に出て、それが伝わってくるのが感動に繋がる。

もう一つは地域の総合力である。観光は地域に来てもらうことが大切。他でも体験できることならこの地域に行く必要はない。その地域ならではのものが大切。地域の素材を結集して商品化し、地域の総合力で魅力アップを図る。もう一つは地域の中心になる人や機関がいることが大切。

もう一つ、こういったことは地元に住んでいる人でないとできない。売るのは旅行会社を使うというのも手であるが、今どうしてエコツーリズムと言われているかということ、旅行者のニーズが変わってきて、いくつもの観光地を効率よく見て回るということから、一つ一つの地域にじっくり滞留してそこで満足を得ようというニーズが高まっている。日本を代表する地域に伝わる生活文化を楽しみたいというニーズも出てきている。

午前中、秋芳洞の入り口までご案内いただいた。こういう素晴らしい景色を 1 度見ると、5 年～10 年は見なくていいかなと思う。しかしこういう体験ものは、季節によって案内する人によってまったく楽しみ方が変わる。人の工夫次第で楽しみは増し、経済効果の増大も期待できる。自分達の自慢を伝えてそれを認めてもらうことで地域の誇りが醸成される。

もう一つは大規模な施設開発がいらず、埋もれていた地域資源を発掘してプログラム、人さえ上手く作ればどこでもできる。

一方、どこでもできるが故に地域間の競争になるので、まがいものではマーケットに受け入れられない。

もう一つは時代の要請だと思うが、地球規模で広がる環境破壊への対応、環境教育の意識付け、環境教育の強化がこういった動きを後押ししている。それとエコツーリズムの大きなテー

マである、地域資源の持続的な活用。子供や孫に地域の自慢、地域の貴重な資源を残していきたいという時代的背景もある。その中で最近教育問題でもいわれているが、子供に本物の自然体験をさせてやらなければならないという思いもある。軽井沢の子供達のプログラムの中で火をおこそうとした時、マッチの擦り方さえ分からなかった。

我々がごく当たり前前に親や近所から教わってきたことが子供達に伝わっていない。生活のありふれたことが伝わってない。観光の中でこういったシーンを伝えていくことが大切。あとはガイドの解説によって自然の尊さ、環境の貴重さ、どうやればそれに配慮した生き方ができるかということが知識の面から気付くことになる。

もう1つは頭の中での知識だけでなく、心の面から自分の生き方を見直す機会作りも求められていると感じる。

エコツーリズムについて少し理屈を整理する。開発途上国の森林伐採は地球規模の環境破壊にまで広がろうとしていた。これを食い止めなければならないが、開発途上国において経済振興は至上命題だった。この為、発想を変え、森林を残してそこに観光客を案内することで生活の糧にしようということ、つまり自然資源の観光活用から、30年前に起こったのがエコツーリズムである。この途上国から始まったエコツーリズムは、先進国にも徐々に広がってきている。しかし先進国に入った時から自然保護の為の産業の転換という観点はあったが、観光全般をもっと持続的なものにしていこう、観光による地域振興を実現していこうという考え方に摩り替わってきている。

そしてわが国独自の推進方針が必要ということで2003年、環境省が中心となって大きな動きを作ったのが今の流れになっている。それがエコツーリズムの概念ということで、みなさんに配った資料の中に入っている。『エコツーリズムとは自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任をもつ観光のありかた』。そしてエコツーリズムとは地域社会の仕組みである。それを実現する一つ一つ

のツアーのことをエコツアーという。

これまでエコツアーは原生的な自然におけるガイドツアーだけであったが、環境教育を主目的とした学校団体の活動や、文化に関する解説も入れたり、自然の中で恵みを体験したり、農林業の体験等を含めたものをエコツアーと呼ぶ。一般的な観光ツアーとの違いは、エコツアーは資源をストレートに伝えるのではなく、ガイドが行うガイダンスによって資源の価値を高める。ソフトによる付加価値を資源に加える。

エコツーリズムとは何かと考えると、ガイドが地域資源そのものの体験による価値とガイドによる付加価値を加えることで、旅行者が高い満足を得る。それによって環境保全への気付きをする一方で対価を支払う。地域資源の価値が高まる。普通の観光より高い価値を生む。資源を守るためのルールを作る等の保全活動に使うという仕組み。このお金で資源の保全をすることで経済効果も働ける地域のよさの再認識、地域の活性化を図るなどがエコツーリズムの考え方。こういう流れがエコツーリズムの考え方。

しかし、理念は気高いが実現は簡単ではない。とりわけ日本は人件費が高いので難しい。2003~4年当初の実際の取組みを見てみると、わが国の中ではほとんど不合格だった。この3年間で目指したのは普及と定着。理論より実践である。日本に入ってきた頃から10年間は学者・評論家が議論ばかりしていた。何が正しいかというより実践が大事だということでこの3年間やってきた。

その為にはゴールは一つではなくて、地域ごとの取組みを大切に、これを3つに分けた。累計「わが国を代表する豊かな自然の中での取組み」、累計「軽井沢等多くの来訪者が訪れる観光地の中での取組み」、累計「里地・里山の身近な自然、八海山等地域の産業を活用した取組み」。これによって地域の実情に応じた支援をしていこうとした。しかし、好き勝手にやっていいという訳ではなく、少なくとも2つはクリアして欲しいとした。

1つは、資源の価値を高めて観光活用すること、2つは決まりごとや基本方針を決めて取り

組むこと。例えば地域に古くから伝わるしきたり等を大切にす。例えば小笠原では鯨を見に行くツアーが多く組まれているのだが、鯨の生態を守る為、事業者が自分達で集まって自主ルールを決めて管理している。一方で法制度によるものでは、小笠原の南島は東京都が指定する自然ガイドが同行しないと入ってはいけない。2時間以内、一日100人以内。ガイド1人あたり15人までしか案内してはならない。年に3ヶ月間は人の出入り禁止というルールがある。

モデル事業を通じて気付いたことは、屋久島・知床はガイドランスが成熟して地域経済に貢献しているが、資源の適切な利用がなされてなくてなんらかのルール作りが必要。一方軽井沢ではガイドツアーの成熟度の差があり、ガイドランスを実施して環境教育効果を発揮していくことが必要。里地・里山では地域の活性化に向けて特徴ある資源を活用したエコツアーを実現することが急務。つまり地域・資源の状況によって取組みの場面が違うという状況があった。日本のエコツーリズムの進展は地域の誰かが頑張ってエコツアーを実現させ、この小さな成功の積み重ねが地域活性に結びついた。それが周囲の地域に広がっていき、みんなでやっていくようになる。そうすると関係者間に考え方の違いが生まれてくるので、資源保全へ向けたルール作りが必要となる。

秋吉の取組みはいきなり4・5・6というより、1・2・3を着実に遂げて行く中で、ただし、中心になって進めていく方はやがて発展への仕掛けや工夫を考えながらまずは小さな成功を積み重ねていくことが大切。

それでは実際にエコツアーを実施していくことについてだが、まずは地域の素材を発掘すること。素材には自然、林業、生活文化、技、地域の伝統的な景観等。

もう1つは人。伝承を伝えるような人の存在が大事。もう1つは素材をいかにして磨くか。一般的なものではなく、地域ならではの研究成

果、高度な情報が素材の価値を高める。

もう1つはどういった場面で自然を感じてもらおうかということ。安全管理、価格などを考えてようやく商品になる。地域振興に活用して行く場合は、誰かが組織の中心になっていくことが大切。観光に行き詰った場合は地域で一丸となっていくことが大切。

最後の例は埼玉県の深谷市の教育委員会で主催されているサマースクールイン下田。お寺で歴史を聞く。漁船体験。海ほたるを夜見る。カニのオスメスの判別をしたり、昼は漁村の民宿で婦人会の方達よりご飯を振舞われる。夜は民宿の方から民話を聞いたり、夕涼み会に参加したり等。こういったツアーを作っていくという事例。エコツーリズムとは資源・人・来訪者等様々な要素が地域社会の中で互いの立場を気にしながら、時には形を変えながらも地域社会が持続して行くシステムだといえる。地域のよさや孫や子供の代まで残していく。

このようなエコツーリズムは誰がするのか。地元の人たちが自ら考え、行動するしかない！地域の総合力を発揮して行くためには共通理解をもつことが大切。私がこの仕事を始めて間もない頃、出張先で子供達に次々と挨拶してもらった。観光は地域の人にどういう風に迎えられるかが強く印象に残る。ツアー自体も地元の人から愛されているようなツアーの方がなおさら価値がある。自分だけというのではなく、誰にとってもいい将来を築けるようにお互い協力することが大事。合意形成というのがキーワード。このためには話し合いが重要。話し合いも観光に関っている人だけでなく、住民、行政様々な方がお互いに集まることが重要。協議会が大事。協議会を運営するような人や組織も大切。また協議会をやるときは地元研究者、総合的な事務局の存在や、地域の外にいる人間、専門家は情報提供役として事務局に支援していくことも重要である。

以上で終わります。

## パネルディスカッション

テーマ 「秋吉台のエコツーリズムに期待するもの」

コーディネーター 山本時博氏（山口県観光戦略会議議長）

パネリスト 寺崎竜雄氏（(財)日本交通公社企画課長）

庫本 正氏（秋吉台科学博物館名誉館長）

永嶺克博氏（とってゆかいな秋吉台ミーティング事務局長）

山崎麻里氏（秋吉台科学博物館学芸員補）

### コーディネーター・パネリストプロフィール

山本時博氏  
山口県観光戦略会議議長、エコツーリズム秋吉台地域戦略会議議長、県観光審議会委員等。  
『持続可能な観光』をテーマにライフワークで取り組む観光学研究者。

庫本正氏  
秋吉台科学博物館名誉館長、エコツーリズム秋吉台地域戦略会議推進部会長、秋吉台パークボランティアの会世話人。  
40年にわたり秋吉台の自然・文化を探求している。

永嶺克博氏  
とってゆかいな秋吉台ミーティング事務局長、エコツーリズム秋吉台地域戦略会議企画部会長。  
梨生産農家35年、梨下村塾塾長として子ども達に食育18年。

山崎麻里氏  
秋吉台科学博物館生物担当学芸員補、エコツーリズム秋吉台地域戦略会議企画部会委員。  
主にコウモリについて研究している。



【山本】：皆様お疲れ様です。これからは具体的な話しを進めていきたい。

秋吉台戦略会議は昨年7月に立ち上げて部会に分かれて大変な回数を重ねてきた。どこにもモデル的なものがないので手探りの中、本日、秋吉台推進戦略を承認頂き、『はじめよう、

広げよう、秋吉台エコツーリズム』ということで第一歩を踏み出す。

まずは寺崎さん、秋吉台に20年ぶりに訪問された印象と観光についての研究員として活躍されている視点からどんな感想をもったかお聞かせください。

【寺崎】：今日の午前中秋吉台を1時間くらい案内してもらい、洞の入り口までという限られたところの感想ですが。今日の率直な感想は地域の自然資源は日本を代表する超一級品であることには違いがない。

一方でその素晴らしさが伝わってこないというか、素材は一級品だがそのまま味付けがないと感じた。家族を連れて来たとしてもどこへ行って何を楽しめばいいのか思い浮かばない。レンタカーがあるとしてもどこをどうやって巡ったらいいかが分からない。観光客が具体的に素材を味わえるような用意・工夫が必要だと感じた。

【山本】：昨年からエコツーリズムの推進案を作るために頑張ってきたが、本日でき上がったということで、推進案の前の段階から携わっていただいた庫本名誉館長さん。推進案ができたことでどのような期待をしているか、自己紹介を兼ねてご発言いただきたい。

【庫本】：私は大学を出てからすぐ秋吉台科学博物館の学芸員として勤めた。長い間秋吉台と接してきて、この秋吉台を沢山の人に感じていただくことが大事だと感じている。科学博物館ができたのは、秋吉台空爆演習地問題というのがあって、米軍の演習地だったのを学術価値の高い山だと米軍に訴えて演習場を撤退してもらった経緯がある。それがもとになって、学術的の高い秋吉台を多くの人に知っていただく、自分達や沢山の人が研究したことを知っていただく、そしてきちんと保護しながら秋吉台の価値を高めていくという目的で博物館ができた。博物館で研究すると同時に、修学旅行生等に秋吉台について教育普及活動をしてきた。退職前から秋吉台国定公園の自然公園指導員というのをやっていて、自然公園に関する様々な情報を県に提供をしてきた。山を歩いていると色々なことに気付いて、退職を契機に秋吉台の修復をするボランティア活動を始めた。今年で8年目。月に2回、みなさんと汗を流しながら道を修復したり、裸の土地に草を植えたり、竹を切ったりなどして草原の復旧をしている。こういう過程の中で、地域の方が地道に自然観察会等を開いていて大変いい状態が進んでいると楽しみにしていた。この度エコツーリ

ズムという素晴らしいアイデアができてみんなできり立っている所である。

【山本】：地元活動されている永嶺さん、よろしくをお願いします。

【永嶺】：私は秋吉台にはほとんど関係のない人間であるが、秋芳町の、秋吉台周辺の住民の一人としてご意見を言わせていただきたい。先ほど紹介にもあったが、平成5年から私のようなメンバーが集まって秋吉台を考えようということで、とってゆかいな秋吉台ミーティングというボランティアの活動グループができ、活動している。

昨年から県の中山間地域づくり推進室というところでやまぐちスローツーリズム推進委員会の委員となっている。私の本業は秋芳町の特産品である梨の専業農家である。今日はエコツーリズムの推進の中で我々が15年間やってきたことが生かせたらいいなという思いで来た。よろしくをお願いします。

【山本】：続いて山崎さん

【山崎】：私は平成15年に秋吉台科学博物館に生物の学芸員として勤め始めて今年で4年目となる。その前に山口大学でコウモリの研究をしていて秋吉台はフィールドとして年中通っていたので合計7年の関わりである。学生の頃は秋吉台は洞窟しか関わりがなかったが、現在秋芳町に住んでいて色々な方と接するうちに秋吉台は一つだが、色々な見方があり様々なものを求めて秋吉台に来るのだということが分かった。ただ見て感動して帰る方や、博物館に足を運んでもっと詳しく知って帰る方もいる。秋吉台についてもっと色々なことを知って、より感動して帰ってもらうために、このエコツーリズムはとてもいい機会だと思う。先ほど寺崎さんの話にもあったが、秋吉台をアピールしていくために大事なものは、地域に関心する方々だと思う。まず秋吉台がどういう状況なのか、元々どういう現状で、どういう問題が起こっているかをみんなで共通の認識を作っていくことが大切。この上で秋吉台に来られた方に秋吉台の魅力を最大限に理解してもらい、それを長い間将来に渡って活用していく為にはどうしたらいいかというのを考えるのも長い間地域に住んでいる方々だと思う。エコツーリ

ズムを地域を含めてみんなで考えていくことが非常に大切だと思う。

【山本】：先ほど寺崎さんの話にもありましたが、エコツーリズムを進めていくにはまず地元理解が最も大切だということがあった。庫本さん、この意味で地域のエコツーリズムを仕掛けていく理解を今から求めていかなければならないのだが、一時、多くの観光客があった時代に比べ観光への見方も変わっていると思う。地元の方はどうか？

【庫本】：秋吉台は優れた山で一目見ただけで感動するが、最近やはり、野草を観察すると沢山の人ややってきて感動する。またエコミュージアムでは子供達がやってきて洞窟の自然やカルストの自然を勉強して感動するということがあって、地元の人たちにもっとプラスアルファの、今の料理の味付けの話ではないが、その辺が進めば進むほどもっと良くなるという雰囲気は浸透してきたと思う。

【山本】：先ほど日本でも一級品の資源という話があったが、公園の中でも木を見て森を見ずというよう、一部分を取り出して評価せず、全体的な価値の重さで見ることが重要。地元民もまだ理解し切れてない、資源の価値を高めるという意味でエコツーリズムを推進していけば地域資源に磨きがかかってくると思う。

秋吉台をフィールドとして活動している永嶺さん、地元の活動という点でこれからどのような形で地元理解とか参画を呼びかけたりしていく必要があるでしょうか。

【永嶺】：先ほどから地元の人が感心をもって理解してという話があったが、我々が秋吉台ミーティングを結成した時は自発的という感じではなかった。この点について少し話していきたい。平成5年に全国自然公園大会が秋吉台であった。この時に山口県の職員の中にぶちええ山口を広める会というものがあり、その会から秋芳町の人達、おれたちの話を聞いてくれないかという要請があった。我々はちょうど地域で町長の諮問機関が出来上がって、そのメンバーで意見交換をした。秋吉台の現状という箇条書きしたものを我々に示した。その時にいくつもあった問題点を我々はほとんど知らず、大変恥ずかしい思いをした。その当時、自

然保護は地域に住む者にとっては足かせでしかないと思っていた。保護では飯が食えないという思いだった。また今では普通に使われるワイズユース、これはその時初めて知った言葉だったが。賢明な利用、保護しながら活用しようというもので、活用があるならやってみようと思った。

そこで初めて、庫本先生が言われたような秋吉台の良さ等を分かり始め、熱心に取り組むようになった。だから一般の町民については、近くににいるということで余計に意識が低いのではないかと思っている。これまで15年間活動してきたが、ボランティアとしては限界がある。やりたいことはあっても、仕事をもつてのボランティアは難しい。これ以上のことはNPO法人化が必要という議論もあったがなかなか進まない。今回エコツーリズムに期待するのは、これ以上に踏み出していける新しい仕組みができそうだったからだ。

【山本】：ありがとうございます。仕組みの問題については後でもう一度お話ししたい。現在、地元理解ということで、日本のあるところの観光地では「こういう形で地域振興をしていこう、観光地作りをしていこう」ということで、民族感や歴史感等に関連した施設を計画の中に急に織り込んで、観光振興に一躍買わそうという動きが多々ある。秋吉台地域は非常に価値があるものとして秋吉台科学博物館、エコミュージアムという両脇に知の集積としての機能がある。このことは他の地域と比べて非常に重みがあると思っている。ゆくゆくはガイド、インタープリターを要請したりしていく段階で、大きな役割を果たしていけるのではと思っている。

そこで地元の知の集積として科学博物館があるということで山崎さん、これからエコツーリズムを推進していく中でどういう風に関与していきたいと思っているか。

【山崎】：秋吉台の科学博物館は庫本先生を始め、長い間秋吉台に関する研究を最先端で行ってきた。学芸員は私を含め3名いて、それぞれ地質学や生物学、古生物学等を専門に研究している。私達以外にも山大や九大等近隣の大学から研究者が来られて研究している。研究成果

は秋吉台科学博物館で発行する研究報告や、その他の学術雑誌でも報告されている。

今でも秋吉台で分かってないことは沢山あり、最近分かったこともいくつかある。そのうちの 하나가昨年、秋吉台で新たに豎穴の洞窟が見つかった。地獄台の近くの桐ヶ台という場所で見つかり、山大と博物館の共同で調査した。縦100メートル級の豎穴で、中から過去に秋吉台に生息していた動物の化石が発掘された。一番目玉になったのは、ナウマンゾウの子供の歯の化石で、秋吉台で見つかってないものが新たに見つかることもある。

その他にも、山大の理学部の学生が野生生物の研究で自動撮影カメラを仕掛けておいたら、シカやアライグマが写っていた。このように外来動物も秋吉台に入っているということも研究を通して分かってきた。最先端の情報も私達からガイドやインタープリター等秋吉台を説明する方に情報発信をしていくと、研究の最先端を一般に来ていただく方に分かってもらえる。ガイドを通して普及することは大切だと思う。

またワイズユースという言葉が先程からでてきているが、将来に渡って活用するためには壊さないようにしなければならず、このためにはどうすればいいかという基本的な調査を博物館の研究機能を生かして請け負ったり、エコツアーに参加する人達と協力しながら監視していくことも私達が貢献できることではないかと思う。

【山本】：大変大きい期待がかかる。これがあるということが価値を高めていると考えられる。庫本さん、全体的にエコツアーを推進していくために、今後この2つの機関はどのような関わり方をしていくべきか？

【庫本】：40年前、日本一の博物館にしようと思気込んで話していた。秋吉台をただ守るだけでなく研究しようとしていた。当時太田という学芸員がいて、今ではみんな知っていることだが、秋吉台の石灰岩はサンゴ礁でできたということを初めて言い出した。それまで石灰岩の起源は議論されなかったが、その研究成果は、アメリカの教科書にも掲載された。それに刺激されて、お金はないが体力を生かしてスケ

ールの大きな研究をしようとした。

私たちはコウモリ約2万頭を30年間追跡して、コウモリの生命表を作り上げるという仕事をした。その他秋吉台にしかない植物、アキヨシダイアザミについての研究や、洞窟については日本中からやってくる洞窟を探ぐる人達と秋吉台にどういう洞窟があるのかりストを作って行き、中の測量図を30年間永遠とためていった。

そうするうちに洞窟の科学が芽生えて、洞窟学会をつくることになった。このようにして新しい研究が、次々と生まれてきたし、地域でも役に立ったと思う。要はこういう体験談を子供達に伝えることが重要。本に書いたり、私もコウモリの本というのを書いてちょっとした文化賞をもらった。ラジオや新聞、雑誌、テレビで放送されたり、映画などで広がっていく。やはり新しいどこにもないような素材を使ってエコツアーを進めていくことが大事。ここでしかないものが生まれる。博物館、エコミュージアム、美祢の資料館、化石館がエコツアーの中核となって頑張っていたideきたいと思う。

【山本】：大変な資産がある。ラムサールの湿地登録の中で寺崎さん、こうした知的研究機関があるところは比較的少ないと思うのだが、こういう研究機関が存在することで他で取り組んでいないようなことができると思うのだがどうでしょうか？

【寺崎】：地域のことを研究する機関は地域、地域であると思うが、観光と結びついているところは少ないと思う。先程紹介した知床財団は、知床の研究部隊があって、それを普及啓発することで自然に対する思いを知ってもらおうということをやっている。しかし多くの場合研究成果は、論文を書くために使われることはあるが、一般に伝えようと工夫されているところは少ない。逆に観光サイドから研究成果を求めているところもある。小笠原は自分たちで調査しながら伝えているのだが、自然ネタが足りない。研究者はデータだけ持って東京や大阪に帰っていく。地元には伝わっていかない。データを持ち帰ってもいいが、地元にも落とす欲しいというのが現状。秋吉台はそういった受け皿が



あり、地域全体に関する情報が一箇所に集約されるという点で、他の地域と比べてうらやましい。

ただ問題は、学術的な価値や面白さと観光的な面白さは違うということ。観光的にするにはガイドが噛み砕いて、一般の方に分かりやすく伝えていかなければならない。観光と自然科学の融合を、博物館を核にやっていって欲しいと思う。研究者は仮説をもってテーマを追跡していくので、確かめられないと人には話せないが、ガイドは仮説だけでも話すことができる。また研究者に情報をもらって自分の肥やしにしていくという関係も築いていけると思う。いずれにしても土台があるのでうらやましい地域。

【山本】：博物館、化石館、ミュージアムと元々の設立の趣旨に加えて、新たに時代の要請としてエコツーリズムを支える部分を担って欲しいと思う。寺崎さんどうぞ。

【寺崎】：もう一つ研究者の役割について話したい。人為的な活用によって自然の状態が変化している。研究者は科学的に追跡＝モニタリングして観光客が訪れることによる自然の生態の悪化を考えていく役割もあると思う。一般的にそういうことを言う人はどこにいても疎まれるが、エコツーリズムの場合は一緒に考えていくことができる。研究者からのデータを得て、観光行動を変えていく。資源の価値を高める役割と動きをチェックする役割の両方が研究機関の役割として求められると思う。

【山本】：永嶺さん、どうぞ。

【永嶺】：先程、寺崎さんの講演の中で、成果を出しているツアーはリピーターが多いとあったが、我々の活動の中でも知の活用をしている。今日皆さんに山大の公開講座の案内を渡していると思うが、その中の「歩いて学んで理解する～の秋吉台」をやって今年で3年目になる。エコミュージアムの前田先生、庫本先生、動物関係の先生、研究者を配置している。あっという間に30名の定員が一杯になってしまう。このうち半分はリピーターということで、深い話があればリピーターが多くなると感じた。それともう1つみなさんに渡しているのは、10分で歩く秋吉台とってとってもゆかいな秋吉

台ミーティングの最近の活動である。ここでは1から4までセルフマップを作成し、秋吉台の自然をみんなで考えるためのマップとして啓発的な意味合いも含めて作っている。これも科学博物館の資料や助言をいただいて作っているが、実は昨年山大の公開講座に参加した若いカップルが、今年のマップの作成イベントに参加してくれ、マップを見なければ行かなかったという嬉しい話しをしてくれた。

全てがよい訳ではないだろうが、今ある秋吉台に蓄積された知の部分を活用することによってリピーターが増えれば。そしてリピーターからサポーターへと変わってくれればいいと思う。

【山本】：ありがとうございます。マップが出たので、戦略会議で作ったマップについても宣伝したい。今までルート案内と違うのは、歴史的なものも取り入れて作っていること。幅広い興味、色んな視点から楽しめるものになっている。これも一つの進んだ成果かなと思う。いずれにしても3つの化石館、秋吉台の科学博物館、エコミュージアム。エコツーリズムを推進していくためには、エコツーリズム協会を立ち上げる。ここで人材育成や自然保護に関するもの等いろんなノウハウを蓄積していく。この中で進んでお手伝いをして地域の新たな核となるよう期待している。

この辺りで会場のみなさまからご意見をいただきたいと思います。

【一般】：第一点は美祢都市や新しい新市として来年度からスタートするという事。町の立場から考えると、秋吉台エコツーリズムの対象となるフィールドをどう考えるか。秋吉台は狭い意味では、厚東川を挟んで東側である。価値としては厚東川から美祢市側、そして厚狭川を挟んで東側もカルスト台地である。広い意味での秋吉台というのはそれらを全て含んでいる所だと世界的にも認知されている。カルスト地形としては、厚東川流域は侵食地形としての価値をもったところ。一方でそこは農耕とか生活の場である。ましてや西側の地域は自然保護からいけば破壊されている地域である。破壊されている地域は、言い換えれば資源としての価値を提供しているといえる。一方では保全、

一方では破壊。しかし我々の資源、財産として生かされている。

そういうことも考えてこの地域の観光のあり方を考えていくべきではないか。対象となるもの、そしてそれらの保全から考えると、また価値の再発見から考えると多義にわたって未発見の価値が埋蔵されている。そういう価値の再発見について提言すれば、竪穴をいかに生かしていくかも魅力ある観光資源ではないだろうか。この資料には一切ないが、秋芳洞とほぼ匹敵する大洞窟が存在している。鷹ヶ穴、江原台には存在している。国の特別天然記念物にもなっていないが、大正洞、景清洞に勝った洞窟がある。今は保全のために公にしていけないが、400 近い竪穴も有効な資源として活用ができる。あわせて資源の保存のため、展示のためにも、美祢市には歴史民俗資料館、化石館という素晴らしい資料もある。そういう自然環境に関わる今までの研究成果や資料の収集も大切。

この協議の中で欠けているのは歴史や文化に関わるもの。カルスト台地という特有な地域における人間との関りの中で、例えばドリーネの中にある生活、これは民俗学の立場からすれば素晴らしい人間の知恵、生活の歴史が刻まれたものであり、未発見の所も沢山ある。ましてや日本原人という日本のルーツを探るときに注目されているのは秋吉台の洞窟における人骨発見。大変感心をもって調査・研究を出されているが、まだその発見には至っていない。昭和 30 年に山大と東大が学術調査で観音堂の発掘調査をし、縄文遺跡の発見に繋がった。歴史から見ると、残された遺跡が沢山ある。そして台上には縄文から弥生とって台上の生活も確認されている。未発見の歴史遺産も転がっている。大内文化と岩永の岡部氏、また鉱産物に関する遺跡もある。そういった総合的な価値の再検討やそれに向かったのアピールなども必要ではないかと思う。

【山本】：未発見の歴史遺産というお話しをして頂いた。もちろん、これだけでもってエコツーリズムを成立させようというものでもない。今話していただいたことも、エコツーリズムを推進していく中でどんどん付け足して磨きをかけて地域の魅力にしていいただければと

思う。庫本さん、どうでしょうか。

【庫本】：もちろん歴史文化、長登遺跡を始めとして素晴らしい遺跡があるので、ひっくるめてエコツーリズムを確立していかなければならないと思う。一番初めに秋吉台の山焼きを唄った歌があったが、芸術・文化・音楽等、今の私達が日常生活の中で作り出してきた文芸、俳句、随筆、お茶、お花等を幅広く取り入れて地域の文化力の総合の力がエコツーを豊かなものにしようと思う。範囲も美祢から長門だけじゃなく、もっと山口県の広い範囲を対象にしようじゃないかという議論もあり、色んなルートの見学コースも検討されている。今おっしゃったように全部取り入れてやっていきたいと思えます。

【永嶺】：今から一市二町の合併が行われる。新しい美祢市の活性化を考える中で、ここは山の中の市であり、経済の柱は観光と農業である。観光はどういう形がよいのかというと、二つの川の源流をもっているし、自然を保全していくことが地域経済の柱となると思う。先程、開発の話があったが、我々のツアーは龍護峰へ登ると必ず、住友鉱山と秋吉台の高原を見てもらう。日本の経済発展の柱となった鉄鋼関係の原料地帯である住友鉱山と自然を守る秋吉台。どちらがどちらというわけでもないが、観光のいい素材になっている。これらを活用しながら、エコツーリズムが新市経済の柱となるよう一住民として考えていければと思う。

【山本】：今、合併の話が出た。戦略会議の中でも話が出たが、エコツーリズムの展開というのを新美祢市の範囲で考えるにとどまらず、山陽小野田市や宇部市との共同でやっていこうと考えている。宇部市や山陽小野田市、美祢市は産業観光に取り組んでおり、この懸命な利用という意味で、莫大な資産、石灰岩を利用して、人類の福利の為にこれだけ貢献しているところを見てもらって、自然保護を考えてもらう。そういう両方を合体させたものを作り上げていきたいという議論もしてきた。他にありませんか。

【安田（美東町）】：秋吉台は国定公園の指定を受けているが、このプラスマイナスについてどういう風にお考えですか？それと秋吉台は

美東町側が案外広い。秋吉台のこととなると博物館の辺りばかりだが、これは不公平だと思う。もっと秋吉台全体を。こういうことを言うご無礼かもしれないが、私は秋吉台よりも美秋台にした方がいいのではないかと思う。合併があるから控えておくが。その辺、一つよろしくお願いします。

【山本】：エコツアーマップの真ん中に美東町を載せている。今まで載ったことのないものをできるだけ載せて欲しいという要望も出しているところである。これからまた、そこら辺は修正を加えながらやっていきたい。この地域以外の者はどこからどこまでが秋吉台をはしっていて、どこが美東町でどこが秋芳町のところが分からない。入り口が多いと美東町側が少ないような気がするが、地図を見ると美東町はかなり広くて、これは今おっしゃったとおりPR不足というか認識不足だと思う。合併があるからないからというよりはそういうことも心がけて、美東町にある歴史資産を併せて秋吉台のエコツーリズムを構築したいと考えている。

【永嶺】：私達の活動では美東町の歴史文化を紹介している。とくに赤間ヶ関街道は吉田松陰が通った道でもあるし、カルスト地形の農業は赤土を使った農業が特産物として名前が通っている。またエコツーリズムにグリーンツーリズムという農業体験も含まれている。先程寺崎さんの講演の中にも農業体験があったが、今美東町農業の中屋さんが、エコツーリズムとグリーンツーリズムを一緒にしたものをやろうと今取り組んでいる最中である。美東町、美祿市も同じように考えていければと思う。

【山本（美祿市）】：今日、二井知事がおいでになって国際的な中国と韓国の話しをされた。山口県と中国とは友好省県を結んで25周年、韓国とは20周年。今年か来年にかけて山口県と中国への観光ツアー等の動きがあると思うが。今日、寺崎先生の話しを聞いてエコツーリズムという言葉を理解しながら聞いたが、エコとは人的文化的交流もあるが、最終的には経済につなげていかなければならないということと言われたので、エコとはエコノミックのエコと理解して金をもうけなければならぬと思

った。先程から合併問題が話題となっているが、昔の美祿郡市が一緒になるので、早く成就すると思っていたら、22番目23番目の最後の方で合併となって残念な気持ちもある。

ところで美祿市と一市二町の合併ができなかったのは、秋芳町の観光事業が下手だったからではないかと大きな話題となった。なぜそうなったのか。今の日本の人口が減る中で、日本人同士が秋吉台の観光について知恵を絞っても数に限りがある。13億人いる中国の観光を進めていったらどうか。赤字財政を解消することも併せて、今、隣の川本さんが言われたレベルの高い話しも結構だが、当面、秋芳洞秋吉台が赤字の補填をするのは、韓国と中国の観光客。山東省と山口県の友好関係を結ぶ中で、青島から下関へ着くユートピア号のビザなし旅行ができる便利な方法も考えて、秋芳洞秋吉台、美東町まで来てくれるよう近隣の国との関係をしっかり固いものにして外国の方に個々の観光地を潤してもらいたいと思う。

今山口県の中にも8つの都市で日中友好協会があるし、その会議ではぜひそのようなことを中国に働きかけようと、県庁でも国際課の方にそういうルートを確立してお金が外国から入るようにして行って日本を理解してもらうよう活用して欲しいと思う。どうか秋芳洞秋吉台が潤うよう祈念している。

【山本】：国際観光については観光戦略会議でも部会を設けて検討して取り組んでいる。また、エコツーリズムの推進が進んでいくにつれて新しい秋吉台地域の紹介の仕方が外国に対してもできるのではないかと思う。もうひとつかた、時間がありますが。

【古川（県環境生活部）】：今、素材の素晴らしさの話があった。先程、先生のお話しでもあったしマップも素材を並べているが、一番大事なのはこれらをどう組み合わせる旅の物語を作るかということ。高価な値段を出しても是非行きたいと思えるような、具体的な商品を早く作っていただけたらと思う。

【山本】：新しい観光というのは、今、旬なのがセラピーというのがあるが、秋吉台地域はセラピー効果が非常に高いと言われている。洞窟の中や草原等でのセラピー効果。今までのこ

の地域の観光のあり方とは違う、新しい価値づけがエコツアーを推進していくところで発見できるのではないかと思う。今日は長々とありがとうございました。地元の市町長さん、最後までありがとうございました。一言ご感想を。

【美祢市長】：合併が来年3月にできるが、是非新しい秋吉台の目玉をみなさまで見つけて頂きたい。観光客を呼び寄せる策は行政でもできるが、元の観光地の開発については地元のみなさまで進めていただきたいと思います。

【秋芳町長】：午前中の戦略会議でも申し上げたが、素晴らしい方向付けがなされたと思う。もともと秋吉台地域は学術観光が中心で、これに各種産業をくっつけるというのを基本政策としてずっと長くやっていた。しかし今まではこれといって宣伝効果、将来の方向付けについて言葉ではあっても、なかなか発見しがたかったと思う。今回エコツーリズムという素晴らしい自然と環境の問題をクリアしながら保全していくという方向付けができたと思う。まもなく新市となることで、新しい将来のエコツーリズムを推進していきたい、みなさまのご協力をお願いしたいと思う。

【美東町長】：素晴らしい事業展開が始まるとうとしている。先程、秋吉台を取り巻くセラピー効果という話があったが、私どもの景清洞を基点に秋吉台ワイナリーというNPO法人が立ち上がる。それに連動して、山口県カウンセリング協会といって、園田先生が全国的に引きこもりの子供や入社拒否の人などを宿泊させ、癒しの効果を活用して健全な形に戻すという計画をしている。こういうことも一種のエコツーリズムに繋がるかもしれないと思っている。歴史文化のスポットも色々あるが、今まではそれぞれが点在していたが、今後は繋げる意味合いも込めてエコツーリズムに大きな期待をしている。

【山本】：秋吉台に爆発的な人気が出た後、だんだんと訪問客が少なくなってきて、現在は風邪をひいた状態が続いている。しかし観光については、一人が観光すればみな評論家になれるということで、秋吉台についてここがいい、悪いという話しが日常的に出てくる話題の主でもあった。とはいえ、どうやってここを再生

していくのか、もう1度沢山の人に来ていただくにはどうすればいいかと問われた時、なかなか切り札が出てこなかったのも正直なところ。去年から、エコツーリズムという理念を通して新しいものを築っていく方向性が間違いなかったということを経験のみなで感じていたところである。

本日この推進戦略が承認されたということで初めて、秋吉台地域に組織はこうだ、裏づけはこうだという確固たるものができたと思う。沢山の資源を有しながら、私達が一番忘れていたのは、これが実は預かりものだという発想である。この秋吉台を埋没させることなく、再び沢山の人に楽しんでもらえる地域によみがえらせて次の世代に渡していくという、現代を生きる私達はそれを預かっているのだということを確認して、これからの第一歩踏み出した秋吉台地域のエコツーリズムの推進を真剣に取り組んでいきたいと思う。民間の私達と公共、官が一緒になってここまでやった。これからはエコツーリズム協会を立ち上げて、民が主導になって必ずや成功すると思う。大変な所でのバックアップは公的なものをお願いしないといけないという状況は変わらないと思うが、我々も頑張りたい。残るは政治的な判断をしっかりとっていただきたい。地元の方々、議員さん、組長さん、そのことをよろしくお願いしたいと思う。

ということで本日のシンポジウムを終了したいと思います。

## 終わりのあいさつ

庫本正

今日は、「はじめよう、広げよう、秋吉台エコツーリズム」ということで、寺崎先生の大変素晴らしいお話、それから今のパネルディスカッション、大変心に染み入るギターの弾き語り……。これを機にぜひ秋吉台で新しい観光を、エコツーリズムを発展、推進していきたいと思う。このエコツーリズムを進めることによって観光が発展し、さらにその観光が、自然環境の保全につながり、人も自然も豊かになる。そしてみんなが豊かな暮らしをし、それがまたエコツーリズムにつながる。ぜひとも、今年の4月からこの地域の声をあげてエコツーリズムを推進していきたい、ぜひみなさまのご協力をお願いします。



めざそう住み良さ日本一